

デザイン開眼

藝大生も一年のころだったか、広島のお寺の真ん前にCIE(米園文化センター)という建物が忽然と出現した。ほぼ同時期、広島東側の比

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん ん ちく え

①

治山にはABCC(原爆傷害調査委員会)ができた。

CIEには付属図書館があった。縁の赤い眼鏡をかけ、香水がほのかに漂う女性ライブラリアン(図書館士)がいて、「絵をみたい」と言ったら出してくれたのが、「アートとアート・テクニクチャー」という本

誌だった。近代的な建物がたくさん出ていた。

そのうち、私が芸術家の卵

だと分かって紹介された本が、ウォルター・ド・ウィン

・ティーク著の「Design This Day(邦訳・デザイン

宣言)」、レイモンド・ロー

ワイ著「Never Leave Well Enough Alone(口

紅から機関車まで)」という

量産品の美 心奮わす

金持ちのための工芸否定

インタストリアル・デザイン

の古典的名著だった。

CIEの外は米軍のGIが闊歩し、ジープに乗っている。

米園文化が図書館の外外にあ

ふれていた。藝大にもこんな

本はまたなかった。工業製品

の量産品にも美が与えられる

ということを教えられ、私は

きず、戦争という形で破壊の道をたどった。敗戦後、もう

一度、外国からの近代化に乗

って国を立ち上げることにな

ったわけだが、それは自然に

求めていったことで、それで

よかったと思っている。

ただ、私が選んだ美術の道

でどうするか。そこでたどり

ついたのがインタストリアル

デザインで、これで人を救

う、国を救い、民族を救う。

自らも四分五裂せず、使命感

を持ってやっていける道だと

強く感じた。

同じ思いを持った男が同級

生にいた。岩崎信治。上野の

喫茶店でとことん話し合い、

り返しの一年間で硯箱一つを

作る。こんな金持ちのための

工芸では日本は救えない。庶

民の鍋、釜、自転車などすべ

てが表現の対象だ。藝大の創

設者、岡倉天心が古きに情す

ることを考えるはずがない、

などと大言壮語していた。す

ると、昔の縹緞模様の模写な

ど学校の課題が嫌になった。

それで体制批判が始まり、

「美の民主化、モノの民主化」

を主張する方向に突っ走っ

た。そんな興奮の中で気の合

う仲間が、自らを吉田松陰の

松下村塾生に見立て、愛国の

の時、本当に松陰先生が現れ

た。藝大の工芸科助教で来

られた小池岩太郎先生だ。先

生は結核を患って胸の手術を

し、左肩が下がって一見ひ弱

そうな印象だったが、考え方

は非常に前衛的だった。

先生は英国のウィリアム・

モリスや、考現学(モデ

ルノロジオ)の今和次郎

の影響を受けていて、美

校卒業後、沖縄の工芸工

房紅房に行き、素朴な民

芸運動に身を投じた。そ

の先生が「君らの話は面

白い。その通りだ」と応

援してくださったのだ。



武石田君と友人のCIE図書館で調べるもの

図史料には、学校に願

を出さないで観光用のチラシ

などを描いて金を稼いでいる

連中がいた。我々は「もっと

天下大義のために生きるべき

だ」などと説得して歩いた。

納得した者が集まって、グル

ープが形成されていった。

昭和22年の近代化は完成で

門は、茶を三日盛り、その様

三三三

デザイン

小池グループ

小池先生を中心に昭和二十七年（一九五二年）に生まれた「松下村塾」は、原始共産主義的な共同体だった。「グループ・オブ・小池」から通

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん へん ぶん かく え

称GK。授業が終わると皆が集まった。火がなくて寒い時、漏電を恐れて電気が切られていた時など、先生が事務局とかけあい解決してくれた。私が広島から持参したものはカボチャやサツマイモ、それCIEEの図書室で借りた

がなくなると食堂でメシが食えなくなるのでカボチャなどが役にたった。翻訳のために持ってきたデザインの本は、「これが文明の匂いだ」と言

この件で私と岩崎が教官室に呼びつけられた。図案科の科長は須藤雅路先生。とても理解ある方だったが、この時だけは机をバーンとたたいて、

環境全体の造形芸術を目指したバウハウス運動で、私に大きな影響を与えた。バウハウスの機能主義、それは芸大にない重要な考え方だった。

また、ニューヨークの近代美術館（MOMA）の椅子のデザインのコムペで二等になったチャールズ・イームズの

GKの最初の仲間は岩崎信治、柴田猷一、伊東治次。その後

と友達で、彼が偽学生だと知って一緒に遊び回っていたほどだから、大変な豪傑

芸術祭の時に「構成」というテーマセンターを制作した。

の関心と同時に、コムペは時代を作るための運動だということを知った。

6人結集 大学と対立

バウハウス運動から影響

加、私を入れて六人が塊で活動した。当時、有楽町で詩を売っている人がいた。我々もそれに倣って、亡国のカリキ



恩師、小池岩太郎氏（左）と談笑する筆者（東京芸大図案教室前）

そんな折に毎日新聞社が昭和二十七年、第一回新日本工業デザインコンクールを開催した。六社ほどのスポンサー企業が出し、最終的に全部を合わせ一席、二席と決めるデザインの競争の場だ。

これで「図案科」にありと叫びたかった。というのも芸大では油絵とか日本画、彫刻の連中は威張っていて、サイドワークでお金をうまく稼いでいるのは図案科だと言っていた。だから、「お前らに

新設せよなどと大学批判を下レーシングペーパーに書き青に焼いて、「デザインレポート」と題し、大学の正面玄関で一部二十円で売った。

それは一生涯の拠りどころだ」と弁解してくれた。そのころ、モダンデザイン

私と岩崎は東芝のテーマに挑戦し、蛍光灯スタンドで応募した。図面は岩崎が担当、私はモデル造り。結果は見事に落選したが、この落選が激憤心に火をつけた。

毎日新聞社の第二回新日本工業デザインコンクール（毎日コンペ）で特選一席をとったのが、小杉二郎さん。画家、小杉放庵の息子で、小池先生

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん けん あん かく え

とほぼ同年代の三大の先輩だった。我々はまだ入選してないが、強烈な対等感が出てきた。最新鋭の位置にいるという意識である。

幸大四年生の時、小池先生から姫路で全国空襲被災者慰霊展のコンペがあるので、参加しないかと言われた。私は

広島原爆のこともあったから、すぐ参加の返事をした。姫路城と対峙する瀬戸内側の小高い丘の上に犠牲者の魂を祭ろうというのが趣旨だ。

私の作品は、山の上に直径二十以上の大きなドームが鎮座し、その中に入ると極楽浄土が描かれているという構想だった。審査委員長が東大の建築学科の岸田日出刀さんで、

モダン追求 全国発売

信頼を獲得、活動のバネに

「言は建築科の学生ではないのに、なぜ出品したのですか」と聞かれた。広島体験を語ったら、「なかなか面白い形だね。しっかりやりたまえ」と激励された。一等にはならなかったが、入選し、大いに自信になった。

このころは、結構椅子を作った。小池先生は「椅子はデザインの基本だ」とおっしゃったが、椅子はデザイナーの

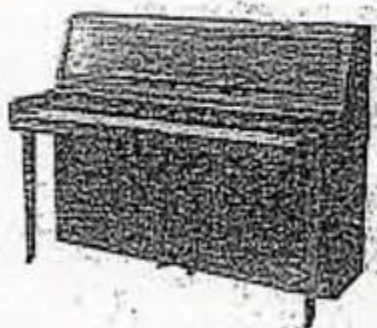
力を試す代表的なものだ。材料、人間を支える構造的性、彫刻性、空間構成などが要求されるからだ。昭和二十八年（一九五三年）の新制作協会展・家具建築部門では椅子が初入選した。

日本楽器（現ヤマハ）の川上源一社長からピアノのデザイン依頼が小池先生の所にきたのも、四年生の時だった。

川上さんは四十歳そこそこの社長になったばかり。「時代は変わった。今までの古いピアノから新しいピアノへ」というテーマで、我々GKのほかに、千葉大学の山口正城先生、戦前から日本にいた米国の建築家アントニー・レーモンド氏の三者に依頼した。当時、川上さんは松下幸之助さんと三方目ほど海外視察をした。羽田に着いた時、

二人とも異口同音に「これからはデザインだ」と叫んだという逸話がある。

だが、その後のやり方は対照的に分かれた。松下さんは社内デザイン課を設け、川上さんは外に求める道をとった。こうしてインハウスとフ



GKグループがデザインしたヤマハのアップライトピアノ

リーの二つの流れが、しるぎを削っていくことになる。

ピアノ計画では、最終的にGKが選ばれた。アップライトは、当時一般的だった黒塗りラッカー仕上げではなく、木目を生かした木地仕上げ、グランドはマホカ仕上げで、脚が黒塗りラッカーとい

うモダンなものだった。最終的に商品化され、全国に販売された。この時の収入は学校に入ったが、我々には何人かで大騒ぎしながら描いた絵が形になり、製品になっていくことが面白かった。この仕事でGKの信頼性が高まり、今後の活動へのバネとなった。

また、千代田区長から小池先生のところへ東京駅前広場計画を作成してほしいとの依頼がきた。私は都市空間に興味を持っており、「やります」と答えた。テーマはこれからのモータリゼーションに対応して、駅前広場と自動車の関係を研究することだ。

建築科出の福田良一先生が参加し全部で六人、合宿という雰囲気です。三カ月間で作成したが、計画は実施に至らなかった。だが、後に新宿西口計画を知った時、我々の構想と極めて近いのに驚いた。（インダストリアル・デザイン）

活動拠点

昭和二十九年(一九五四年)の第三回毎日コンペに再挑戦しよう、仲間を募めた。一期下の鴨志田厚子さん、中村次雄君らだ。テーマに選んだ

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん へん ちく え

のが積水化学のプラスチックを使った製品で、台所用品の一切を作ってみた。

毎日、一案ずつ考えた。例えば、角を丸くして一粒の米も残らない米びつ、パンがぐにゃつとならないように支えて切るパン切り、汁が外にこ

点。これだけの模型を作るのは大変だから、全部絵で描き、図面をつけて出品した。

この時は学生で初めて特選三席に入った。賞金が二十万円。入選者は新聞に名前が出る。大学の事務長が近寄ってきて私の肩をたたき、「おめでとう。それでたまった学費私えよ」と言った。二年分以上の学費はたまっていた。

デザイナーの道決意

定期収入「光の自転車」から

鴨志田さんは今は静岡文化芸術大学の生産造形学科長をしている。中村君は卒業後、積水に入り、定年後は千葉工業大学の教授を務めた。

昭和二十九年には広島のお寺を知恩院系のほかのお坊さんに渡して、東京の上石神井に家を建て、そこに母、弟妹と一緒に住むことにした。つまり、インダストリアル・デ

いうことだ。機家の人には「私の教えをデザインを通じて広めたい」とあいさつした。

昭和三十年三月、藝大を卒業した。ある日、自宅に岩崎と柴田が阿佐ヶ谷から自転車で駆けつけてきた。何かと思うと「丸石自転車から話があったぞ」と言う。チャンスだった。自転車業界で自転車を専門家にデザインさせたの

は、これが最初だった。契約の内容は、自転車を新しくすること。当時の自転車はほとんどが真っ黒だったから、仏壇自転車などと呼ばれていた。我々が考えたコンセプトは、「黒という闇は去った。光は帰ってきた」。つまり、空襲警報がなくなったので、闇は去り、光が帰った

と、赤、白、ピンク、グリーン

転車を作った。

カラフルな自転車は多くの女性ユーザーを吸引した。後のことだが、昭和三十八年にパリのルーヴル宮殿で開かれた「世界工業デザイン展」で、「丸石ロードエース号」など三車種が日本から自転車で唯

受注していたので、これを基に研究事務所を設置できると思ったのだ。



GK 喜ぶ (手前が)

この広告会社は、藝大の学生を集めて絵のアルバイトをさせていた。加山又造なども描いていた。柴田は国木田独歩の孫で、絵は天才的だった。我々は広告のバイトで才能をムタに使うなど仲間

に引き入れたのだった。家主さんは代々の旧家。非常に大きく立派な家で、二階を外国人が借りていたが、最後は我々が全部を借り切る形となった。近隣には安井曾太郎のアトリエなどがあって、閑静な場所である。

川上源三社長の紹介で、子会

(インダストリアル・

昭和三十年（一九五五年）には博士重來を期して、第四回毎日コンペに応募した。G Kメンバー全員に、広島から前田又三郎が参加した。

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
じ けん あん ちゆう へい

⑤

私が氏に質問したので前田も私に気がつき、講演終了後、私の後を追いかけてきた。彼は当時、広島大学工学部の学生で、デザインへの思いを語り合った。毎日コンペのテーマが安川電機のモーターだったので、工学部ならモーターに詳しいだろうと前田を東京に呼んだ。彼はマツタに入っていたが、デザイン部長で退職後、

「茶道具」風のモーター

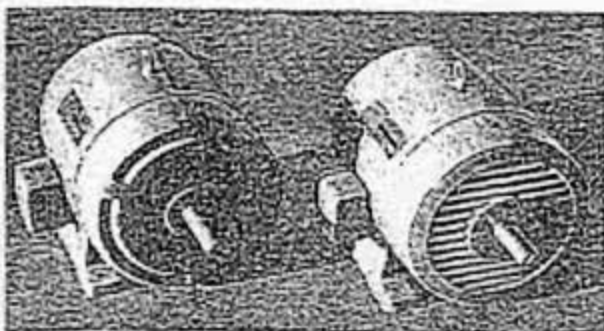
明るく便利に、夜ごと議論

GKとマツタなどで昭和六十二年に設立したデザイン総研の社長となった。モーターは鏡物一つ見ても無造作に作られているので、これをデザインするのは三題の難題だ。明るく、修理しやすく、使つのに便利な形にデザインしたら、特選二席（賞金五万円）に選ばれた。

その後、毎日コンペでは第八回までGK関係者や表大の後援が毎回入選、GKは「夜の盗賊、野を走る」と言われた。夜にデザインの計画を練っていたからだ。後援もこぞってGKの山門をたたいた。GKはデザイン会社という事業体を形成し始めていた。

また昭和三十年には、重重な体験をした。ドイツのパワハワスの五形理念を継承した

米国のIIT（イリノイ・インスティテュート・オブ・テクノロジー）のデザイン学科教授、コンラッド・ワックスマン氏が来日、十一月に東大工学部でセミナーを開いた。期間は半年間に及んだ。

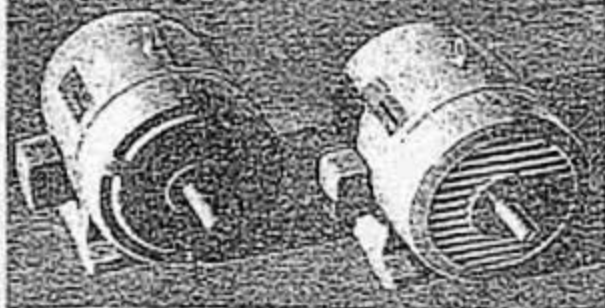


第4回毎日コンペで特選1席を受賞した汎用モーター

で、小学校をデザインするのが課題だ。パイプとコネクタをつなげて三角形のフレームにし、さらにつなげていくと大屋根などができる。二十一人を三人ずつ分けて、プラン、構造、設備など毎週テーマを変えていき共同制作をした。パイプを使って組み立てる意味ではインダストリアル・デザインの分野だった。

セミナーに私はただ一人オートバイで乗り付け、地面につけた片足を軸にオートバイを回転させる芸当を見せたりした。GKデザインのオートバイの処女作YA1だ。優秀な建築料出身者の中で、「自分分はインダストリアル・デザインだ」という思いが派手なパフォーマンスをさせたのだ。このワックスマン・セミナーを受けたことで、私には建築・都市の分野がぐっと身近になった。

（インダストリアル・デザイン）



第4回毎日コンペで特選1席を受賞した汎用モーター

大学院レベルを対象だったが、小池先生は私を推薦してくれた。二十一人の参加者のうち私だけが図案で、ほかは建築料出身。磯崎新が同じグループで、英語の建築技術用語を教えてくれた。

（インダストリアル・デザイン）

昭和三十一年(一九五六年)には日本貿易振興会(シエトロ)によるデザイン留学生派遣の募集があった。当時は通産省(現経済産業省)にもま

書 歴 履 の 私

司 憲 庵 久 栄
じ けん あん かく え

⑧

だデザインに関する窓口もなかった時代だ。
私は「いま黒船に乗らなかつたら、だれぞ行く」と言いつ張って、応募した。その時、ヒクターに勤務していた伊東治次君に「君も行け」と誘った。

審査委員長が何と、甚大の主任教授、須藤雅路先生だった。仏縁というべきか、我々は合格した。費用は総額百十万円くらいかかる。半分は政府が出すが、残りについてはGKに資金的負担はかけられず、自己負担しかない。

一緒に「お金をつくる」一期生四人が半年前に来ておと伊東君の親類を回った。伊東君の祖父は、伊藤博文に認められた一人を入れて全部で四人

国費で初、自動車学ぶ

圧倒的な物質文化と接触

められ、晩年は枢密院の最長老として活躍した伊東巳代治伯爵だ。親類を前に大演説をしたら、定期預金を出してくる人もいた。私も親類や友人から借金して何とか四十五万円くらい集めた。

それでも足りないから一計を案じた。米國に行つてシェルトロからお金の一部を使わせて、個人車日頃の三分

酔いが回ると、一升瓶ならぬコーク瓶を握って美校伝統の「ヨカチン踊り」をすると、女の子たちがキャーキャーと騒いだ。この焼き鳥パーティーが評判になり、まさに文化交流を地でいった。

学校では自動車デザインを専攻した。国費で留学し、自動車のデザインを専攻したのは、日本で私が最初だというのが自慢である。日本では鉛筆淡彩などでやるところを、米國ではキャンソン・ペーパーを使って、光で描く方法だった。立体感が出て、色を塗る必要もなかった。



将来、日本で小型自動車を作りたい思いがあったので、小さな自動車のスケッチをしていると、先生から「せっかく米國に来たのだから、アメリカの車も勉強して帰りたい」と言われた。

圧倒的な物質文化との接触で、たくさんのデザインの芽が開いていったのは確かだ。こうした米國での体験を「ロサンゼルス行進曲」というタイトルの映画にしたい、というのが年来の夢である。(インダストリアル)

有限会社設立

坂本龍馬のよきな青雲の志を持って米國に留學したが、わずか一年で米國の快適な生活でアメリカナイズされ、髪はG-I刈り、デザート食べ過

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
じ けん めん かく え

⑩

デザイン研究所を設立、年長の私が代表取締役所長に就任した。日本楽器の川上社長がGKの会社経営を心配し、公認会計士の川島和郎さんを派遣してくれた。資本金五十六万円で発足した。私は「私が所長である限り、給料の遅配、欠配は絶対させない」と宣言した。そうすることが、インダストリアル・デザインが社

帰国後すぐ所長就任

「年長者は優秀たれ」原則に

会に認められている証拠だと言ったのだ。

ただ、GKの創設記念日は

昭和二十七年十一月十五日、

芸大図案科の一室で日本のデザインを夢見て、同志たちが

結果した時としている。「汝

新を割らん。吾水を汲まん。

共に花を拵じて觀世音菩薩を

折るなり」という心があり、

共に目標に向かっただけで

思った時が創設の時なのであ

る。そういうわけで、今年GKグループの創設五十周年に当たる。

GKグループでも一つ特別な日が、八月十五日。終戦記念日とお盆のころでもあり、公共の施設を借りて、仮設の仏壇を作り、幹部級の社員を集めてつくった社員の供養を、七年前からやるのが慣習になっている。浄土宗の

僧籍を持つ私が般若心経をお

げた後、社員に振り返り講話

をするのである。

会社設立後、今度は岩崎信

治、柴田一両君を海外留学

に出した。柴田君は私と同じ

ロサンゼルスでデザイン学校

に、岩崎君はパウハウスの流

れを汲むドイツのウルム造形

大学に行った。

会社ができてきた卒業生

たちが十人近く新たにGKの

社員となった。私は朱子の「長幼序あり」ということを大事にしたが、同時に「年を食った者は、若い者より絶対優秀でなければ困る」とも言った。これが崩れるとガタがくると分かっていったからだ。

運営に関する行動規範とし



毎年8月、亡くなった社員の供養をする蓋者 (1999年)

鎌倉新仏教の法然、親鸞、日蓮の始祖たちも信念を大衆に訴える運動性が強かったわけで、デザインも運動の形で社会に広めていくことが大事だ。事業は、より多くのデザインされた製品が人々の手に渡り、喜ばれ、感謝されることだが、辛い仕事の方はほとんど入ってきた。学問は、その場限りでなく、デザインの普遍性を学問的に構成することが重要と位置づけた。

こうして、三十四年秋ごろに収入は会社設立時の十倍の三千万円近くに

なっていた。留学から戻った岩崎、柴田両君を渋谷の料亭で迎え、組織力と経済力を備えるようになった状況を報告した。実は、料亭で手をとたくと店の人がとんでくるという場面を一度、経験して

みたかったのだ。(インダストリアル・デザイン)

デザイン

オートバイのデザインについて語る。戦時中に日本業務(現ヤマハ)に蓄積された技術を生かしてオートバイを生産しようと、ヤマハ発動機

書 歴 履 の 私

司 憲 庵 久 栄
おん けん ちく え

®

が昭和三十年(一九五五年)に発足、GKグループが、第一号機のデザインを受注してYAA1が誕生した。

オートバイは、人が今までトボトボ歩いてきたものが、自由自在に走り回れるのだから、こんなすばらしいことはない。イメージ的に書くと、

鹿や馬と自分の間にオートバイがあり、それを重ねていくと、軽快感、敏捷感、生き物感が出てくる。肌合いも雨にぬれた羊毛の色、太陽に光っている鹿の皮膚……。

デザイナーは一種の吟遊詩人なのだ。頭の中に大きくイメージを描き、オートバイのパーツを手分けして、単純で軽快に、鹿のようにというイ

「胸も、心臓も、尻もある」

吟遊詩人のように形生む

メージに基づいてそれぞれがデザインしていく。軍国主義から解放された戦後の日本で、自由に走る馬や鹿は国民の夢を実現するものだった。そのオートバイが優秀だったことは、浅間レースや富士登山レースで次々と優勝したことで、世間に認められた。

だいが後のことだが、昭和四十八年、私はオーストラリアに招待された。シドニー、

港に着いたらさっそくインタビュールームに連れて行かれ、「YAA1やDT1は非常にいいオートバイだ。しかし、あれは欧州のオートバイの変形ではないか」と質問された。日本にはオリジナルがないと言いたいわけだ。

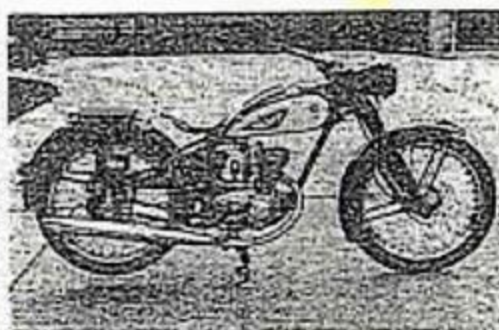
私はとっさに「私たちの国ではオートバイのことをセックスオーガンという。胸もある

れば、心臓もあり、尻もある。男が乗れば、オートバイは雌になるし、女が乗れば牡になる」という言葉が出てしまった。翌日の新聞には「セックスデザイナー日本から来る」という見出しが躍っていた。

そんな時、日本大使館から大使公邸に来てくれと連絡があった。国家に恥をかかせたかとか心配しながら行くと、斎藤寅次郎大使が笑顔で迎

えてくださり、「どのパーティーに行っても日本は物まねだとやられてきましたが、あのように言ってくれたので誇り高いものがあります」と喜ばれていた。

セックスオーガンと見ると自体すでにオリジナルで、



GKグループがデザインした最初のオートバイYAA1

ヤマハ発動機のオートバイはその後もいろいろデザインした。その中で特徴的なのが「モルフオII」(一九九一年)だ。ネーミングは昆虫などの「変態」だが、理念は「人機根源」だ。人間がオートバイに乗ると人と機械が一緒になるイメージで、乗る人の体の大きさに合わせてシートが動き、ハンドルの高さも調節される仕組みだ。

三年前には能の鼓の音と生命が共振するイメージで「プロタイプMT-01鼓動」(一九九九年)をデザインした。オートバイのデザインは、我々にとって、毎日食べている料理のようなものだ。料理のレシピも毎日替わるが、オートバイもパラエティールに富んでくれば文化になる。YAA1は、日本にオートバイ文化を作るきっかけになったと自負している。

(インダストリアルデザイナー)

卓上醤油瓶

GKグループの初期のヒット商品に卓上醤油瓶がある。昭和三十三年（一九五八年）、野田醤油（現キッコーマン）の企画宣伝課から吉田節夫

書 歴 の 履 司 憲 庵 久 栄

司 憲 庵 久 栄

19

（後に専務）と名乗る社員が突然やってきて、「偉い先生はほかにいるが、一番得意な集団にやってきた」と言う。彼は陸軍幼年学校出身、私が海軍兵学校に行ったことが分かり、肝胆相照らす仲になった。

吉田節夫の書、卓上醤油瓶

う古いものを新しく見せる工夫はないか、しかも、すぐに主婦に役立つようなものにしてほしいということだった。だが、伝統を新しくするのは、非常に難しい課題だ。醤油は「醤油くさい」という言葉があるように、高級なイメージではない。醤油差しもあまり変わっていない。

昔の一升瓶の場合、お母さん

開放感 温かさ 機能性

美しい日本婦人イメージ

んが醤油差しに詰め替える時に、こぼさないよう集中力が要る。そこで醤油を工場で小容器に詰めて、そのまま卓上に置くように考えた。戦後の雰囲気は開放感だから、透明感を持たせようと、ガラスで瓶のデザインをした。醤油の量も外からわかる。また温かさを表現するため、注ぎ口をプラスチックの赤いキャップにした。

開閉は塩分の強い醤油を注ぐ時に、醤油のしずくが落ちないようにすることだった。模型を言以上も作っても、切れないいい注ぎ口の醤油瓶ができない。ある日ひらめいたのが逆転の発想で、注ぎ口に六十度ほどの角度で逆に切れ目を入れたら、うまくいった。努力の積み重ねに偶然が味方をしてくれたのだ。

京のどこかの博物館にあった古文書で糊のひらがなを見つけて、海苔の缶にデザインした。GKのグラフィック・デザインの仕事である。インダストリアル・デザインは「エプリング・スルー」でどんな分野にでも入っていいのだ。

当時はまた、日本の生活文



ヒットした。

東京ガスのストープでは失敗もあった。流線型が格好よく思えた我々は、流線型のガスのストープを作った。ところが、全然売れない。デザイン感覚が早すぎたならまだいいが、流線型では上にやかんがのらなかったのだ。

四千台も売れ残ってしまった。困惑の担当課

初期のヒット作品、卓上醤油瓶

た。困惑の担当課長さんに、「私が全部買います。うそじやありません」と言った。すると「いや、結構です」と言う。

卓上醤油瓶は三十六年から販売を開始した。醤油は日本の婦人の文化でもある。この醤油瓶を持つと、小指が上がってかわいい感じがする。美しい日本婦人というイメージも込めたのだ。この卓上醤油瓶が生まれて、戦前の古さを払拭したと思った。

化の中で畳から洋式のベッドへという動きが見られた。オートバイのシートを作っていた双葉製作所（現フランスベッド）が、ベッドの製造を始めた。我々は、体換の時のマットのようなものを使って、ベッドを三つのパートに分けて、押し入れに入れたり、床に直接敷いたり、ソファアーム

「契約も切られてしまっんですか」と恐る恐るたずねたら、「考えさせていただきます」。その後しばらくして連絡があり、責任感があるということ。契約は以前の八倍にもなった。東京ガスが公器として持っている責任感の大きさを感じた。（インダストリアル・デザイン）

山崎浩司も評判になった。東

日本のデザイン

「日本にもデザインあり」という存在証明を世界に示す時がきた。昭和三十年代半ば、坂倉雄三さんをはじめ建築界の人が中心になり、インダス

書歴の私の

司 憲 庵 久 栄
けん あん かく え

トリアル・デザイン分野も参り込んで、ワールド・デザイン・コンファレンス(WORLD e Co.、世界デザイン会議)を日本で開催しようとの機運が盛り上った。

その背景には、世界から日本への「模倣」に対する強い非難があった。昭和三十三年(一

九五七年)九月、藤山愛一郎 々の立場で参加したらどうか外相が英国を訪問した際、英テレビとの会見で、英国製と日本製のボールペアリングを聞かれた。大臣は無礼な質問として答えなかったが、それほど工業デザインの盗用が大問題になっていた。これはまさに翌年、通産省にデザイン課が設置された。

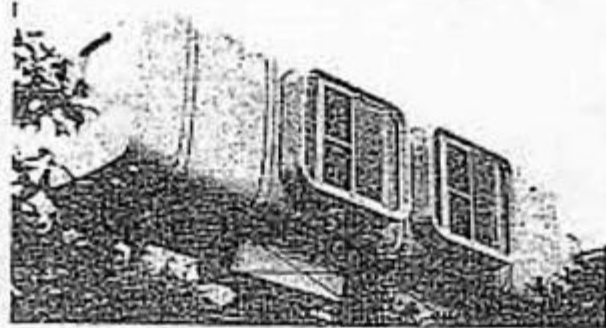
「模倣」に反発 存在証明

建築との融合、考察深める

建築界の盛り上がりに対し、日本インダストリアルデザイナー協会(JIDA)の小杉二郎理事長は、「日本はまだこれからだというのに、高金を使って世界会議はやれない」と大反対した。

JIDAの会員であった私は、理事会上に乗り込んで「我々は世界に門戸を開くべきだ」と反論したが、協会の方針は変わらぬ。そこで、個

クな進化の理論を建築・都市に志向したメタボリズム(新陳代謝論)を下敷きにして、例えを自動車にとった。自動車は都市を破壊するが、また新しく構築するというシナリオを説明した。



メタボリズムの理論を応用したカプセル「ヤドカリ」(1969年)

インで建築・都市を考えることが一つの目標になった。要するにインダストリアル・デザインは空間を道具化してしまう。こうした発想に基づき、小住宅の台所、風呂、トイレなど水回りを一つに固めたユニットを考え、GKコアと呼んだ。カプセルロッジなどの開発で具体化した。

「住居研究―道真論」が評価され、三十九年には米国のカウフマン財団から名誉ある研究賞を受賞した。国際的にも初めての賞、しかも八千ドルの賞金までついていた。

メタボリズムについては評論家の川添登をはじめ、建築家の菊竹清訓、黒川紀章ら多くの研究を発表している。私にとってインダストリアル・デザイン自体がメタボリズムだったから、やっつけていくうちにインダストリアル・デザイン